

## 序文

本書で紹介する「フォレンジック・アーキテクチャー」という調査方式は、建築的証拠の制作と、法律的・政治的フォーラムにおけるそうした証拠の提示プレゼンテーション=上演から成り立っている。その実践では、私たちの建造された環境（built environment）に共通する諸々の要素——建物、細部ディテール、都市、そして風景、さらにはメディアにおけるそれらの表象とデータとしての表現——が、現在進行中のプロセスを問いに付し、未来に向けた主張を行なうための入り口と見なされる。

また「フォレンジック・アーキテクチャー」とは、2010年に建築家、アーティスト、映像作家、ジャーナリスト、科学者や弁護士などの仲間とともに私が設立した研究機関の名でもある。私たちは国家や企業の行使する暴力、とくに建造された環境に関わる暴力を、独自に調べたり、国際法廷の検察団や環境／人権団体からの依頼に応じて調査したりしている。建築物調査、モデル、アニメーション、ビデオ分析やインタラクティブな地図を含む証拠資料を作り出し、国際法廷、真相究明委員会、市民法廷、人権／環境報告書などのフォーラムで提示してきた。一度は国連総会で発表したこともある。

「フォレンジックス（科学捜査／法医学）」という言葉を使っているものの、実際に目指しているのはフォレンジックスの眼差しを反転させ、通常この営みを独占している警察や軍隊などの国家機関を調査することだ。この目的を追求するため、私たちの調査活動は、法的フォーラムにおける手続きの制限や要請を超えて展開されることが多い。私たちは事件を歴史的な文脈のなかに位置づけ、ミクロな物質的細部から政治的・社会的プロセスのより長い脈絡——行為者と実践、構造とテクノロジーの接合（conjunction）——を引き出すことで、事件がその一部をなす世界と再接続する。またこうした調査をきっかけにして、建築、メディアと暴力の関係についてのより長期的な理論的・歴史的な探究に着手し、展覧会や本書のようなテキストで発表することを試みている。カルロ・ギンズブルグの言葉を借りれば、私たちの実践において建築とは「要塞ではなく、港や空港であり、そこから別の目的地へと旅立つ場所」なのだ<sup>1</sup>。

まず「導入」で、私たちの実践の課題と限界を理解するために必須の概念で

ある「検知可能性の敷居」というフォレンジック的条件 (forensic condition) を、歴史的な筋道を辿りながら提示する。そのあと3つの部分に分けて進行していく。第1部の「フォレンジック・アーキテクチャーとは何か」は、題名が示すように一種の実践マニュアルである。この分野で用いられる方法や前提や重要な語彙の概要を示すだけでなく、そこに含まれる制約や潜在的な問題やダブルバインドについても論じることを目指す。そして論述の合間に、私たちの機関が世界各地で行ってきた調査の簡潔な事例や関連する参考資料が散りばめられる。

第2部「パレスチナにおけるカウンター・フォレンジックス」では、フォレンジック・アーキテクチャーの確立にいたった軌跡の原点であるパレスチナで最近行なわれた一連の調査を紹介する。紛争を直に経験する人たちによって最も重要な証拠が作り出されるようになってきていることが引き起こす人権の本質をめぐる変化や、近年の政治的課題との関わりにおいて、私たちの実践がどのように進化していったかが説明される。

第3部「地上の真実」では、フォレンジック・アーキテクチャーの<sup>オプティクス</sup>光学=見方を組織する現場がより大きな領域、おそらく惑星全体にまで広げられる。そこで地球は建設現場であると同時に廃墟のようにも見えるだろう。このパートの中心となる調査は、ナカブ/ネゲブ砂漠の北の敷居に位置し、これまで100回以上も居住地の破壊と再建を繰り返してきたベドウィンの村アル=アラキブにおいて住民たちが組織した真実委員会<sup>オブ・トゥルース</sup>で発表されたものである。第3部では、このローカルな土地闘争の歴史が、より大規模で長期的な環境変化、世界中の砂漠の敷居における砂漠化と気候変動、そしてそのような変化が引き起こしてきた紛争と結びつけられる。

私たちの捜査に「フーダニット (だれがやったのか)」という単純な論理が存在することはほとんどない。しかしながら本書で紹介する<sup>ケース</sup>事件の記述は、すくなくとも、過去に起こった犯罪と現在におけるその調査というふたつの絡み合った話の筋を持つという点においてどこかしら探偵小説というジャンルの慣習に従っているところがある。このふたつの筋は、物質的なものであれ、証言的なものであれ、あるいはメディアをベースとしたものであれ、証拠と結びつく。「フォレンジック」と「アーキテクチャー」は、いずれもすでに確立された学問の枠組みを意味する言葉である。だが両者を組み合わせることで、それぞれが互いの意味を変化させ、異なる実践様式を生み出すのだ。建築はフォレンジックスの目を建物や都市向けさせる。フォレンジックスは建築を調査的な実践に変え、空間的な物質化を通して現在を探索するための様式に仕立て上げる。フォレンジック・アーキテクチャーは、建築家が建造された環境の物質性と、メディアを介したその環境の表象が持つ物質性のどちらにも注意を向けることを要求する。そして重要なことだが、建築家が自らの専門ツールを使って、もっとも敵対的なフォーラムにおいても公に、そして政治的に主張することを求めるのだ。